



賑わった八坂神社境内

骨董市の話が持ち上がったのは平成十五、十六年でした。交流館指定管理条件の協議中で、町並み案内人数も一万三千人を突破するという時期でした。

第一回は平成十八年六月

NPO法人小野川と佐原の町並みを考える会

理事長 佐藤 健太良

「小江戸佐原の骨董市」の賑わい

「百五十回開催記念に寄せて」

当時、伊能忠敬記念館の入館数は伸びていましたが、山車会館の入場者数は伸び悩みました。そこで伝建地区内の回遊性を図るために八坂神社を核にしたイベントとして、香取市事業推進班長の吉田氏より「骨董市開催」の提案がありました。早速、骨董市特別委員会が結成され、幟旗の制作やテナの準備、車の誘導や駐車場の確保等を話し合いました。また、特に支障のない限り毎月第一日曜日を開催日と決めました。

第一回の開催日を五月の連休中にと考えましたが「あやめフェスティバル」に合わせた平成十八年六月四日に第一回「佐原の骨董市」を開催しました。

さらに客数を伸ばすために地元



第63号
平成31年2月
発行 NPO法人小野川と佐原の町並みを考える会 佐原町並み保存会
お問い合わせ 佐原町並み交流館
電話 0478(52)1000

予想を上回る出店数

「小江戸さわら」のロゴを染めぬいた幟旗は好評で開催初日にその一枚が盗まれるという事件もありました。当初、境内の出店区割



ガラポンは大当たり

りは二五店舗の予定が三十店舗に増え、その後も骨董商仲間間で評判を呼び、四五店舗にも達しました。市内の物産店も「焼き鳥屋」や「八百屋」が出店してくれました。

平成十九年度は一回平均千五百人を記録しましたが、残念なこと

百五十回目の記念行事

十二年間にわたり頑張り続けた「小江戸さわらの骨董市」は昨年十一月四日に記念すべき百五十回目を迎えました。

近在の骨董市は成田山境内、「水の郷さわらフリーマーケット」、「多田稲荷骨董市」等もあり、珍しい行事ではなくなってきました。また、高齢化したスタッフによる準備作業は夏の暑さや冬の北風はきついものになりましたが、十二年間の積み重ねを途絶えさせたくないというスタッフ一同は決意しています。

三十万円分の景品に興奮

百五十回記念事業を盛り上げるために、会場内で通用する金券が当たる一回百円で引くガラポン籤を実施。特賞一万円分(5本)一等

五千円(10本)二等三千円(30本)三等千円(110本)末等絵葉書(300本)が当たる確率が、八百本分も売れ盛況でした。

高校生の応援で

順調に進んだ小野川清掃

平成三十年九月三十日(水)の午前九時から、秋の佐原の大祭を控えて恒例の小野川清掃が行なわれた。

「さわらば」の中核である佐原高校生が中心となり白楊高校生にも呼びかけて女子生徒を含め二十余名が参集した。竿さばきも鮮やかな高校生が頑張り作業は今ま



軽々と竿をさばく高校生

研修旅行のご案内

行徳常夜灯と 浦安郷土博物館

～往時の舟運を偲ぶ旅～

実施日：平成31年3月19日(火)

集合：午前8時15分

集合場所：香取市役所駐車場

会費：3,000円

申込み締切日：3月8日(金)

NPO法人小野川と佐原の町並みを考える会

第41回全国町並みゼミ・長野松代・善光寺大会に参加して 歴史的建造物保存と継承に新しい波

平成三十年十一月十六日(金)十七日(土)十八日(日)に行なわれた全国町並みゼミの第一分科会「善光寺門前の場合」に参加した石毛、玉造、根本さんに感想を語り合っていたいただきました。

保存地区の表と裏側

根本・善光寺周辺は相変わらず多くの観光客がありました。またボランティア団体も沢山あって活況でした。しかし、松代町は人口が急減少して、鉄道も廃線となり交通はバスのみになってしまった。

石毛・善光寺門前はとにかく参詣者が多い、特に女性の姿が目立つ。昔から女人禁制を解いていた影響だそうで、観光地としてお客様対応が練れていますね。玉造・宿坊界隈は景観形成も進み、落ち着いた趣がある。でも、門



前の雑踏とその裏通りの寂しさとの落差が大きいのは驚きでした。

石毛・裏道は生活の場で、最近まであった倉庫や工場が本屋とかカフェ等に再生されている。

玉造・歴史的町並みの外側に空き家や空き店舗を再生して、若い人が外部から移住して活性化している。「リノベ」のメッカとして注目されているようです。

石毛・松代の町並み保存は置いてけぼりになっているような感じだ。

本物にこだわらない修復

玉造・パネルディスプレイションでは、「リノベ」の担い手からは「自分たちでそれらしく修復した、本物にはこだわらない」という発言も飛び出しました。従来は歴史的建物を守り、本物に

こだわるといわれる職人の養成とこの町の活性化を優先するという新しい発想が出てきた。

根本・重伝建の周辺で取り組んでいる地元出身でない若者が連携し合っているみたいです。石毛・信州大学の学生が

ガイドで参加していた。学生が古民家カフェに集まっている。商人宿はA I関連会社になっているし、倉庫は子供たちの遊び場兼サロンで手作り玩具の自動車レースも出来て楽しそうだった。玉造・近年は30〜40歳代の外部からの移住者が既存の空家の再生を進めて、町の活性化につながっているようだ。



善光寺門前の分科会入口にて

み保存の一つではないかという新しい概念の発生が異色だった。根本・公金を当てにしないという。石毛・行政に頼ると制限が多く自由度がなくなるといいますね。玉造・まず第一に町全体の活性化を優先するという新しい発想です。

オーバー・ツーリズム

石毛・多すぎる観光客という困った現象ができましたね。東京周辺に外国人が集中してやって来ている。メディアが取り上げると観光客が集中して通行の妨害になる。

玉造・関東地方で観光地化の先陣を切った川越でも収容能力を超える観光客が溢れて、歩き食いやゴミの散乱などで小江戸の風情が失われているという報告が

あった。根本・善光寺でも千円均一などの店が出店して賑やかなのだが、地元の意向を無視しているようで、共存共栄というわけにいけないように見えた。

大学生の協力が大きい

石毛・長野市には大学があります。若者が保存の実行者であり利用者となり活性化に寄与しています。

根本・若い人の協力が目立った。玉造・重伝建地区の内側だけでなく、その外側にある大切なものを守りながら活用して町全体を活性化しようという新しい発想がもたらされてきているようだ。根本・次回のゼミの開催場所が急に川越になり、開催日も2日間とコンパクトになりましたね。

竟成小学校四年生が町並み交流館内で測量

平成30年12月14日(金)の午前9時から香取市立竟成小学校の4年生11人が、間宮教頭と篠塚太一教諭の指導のもと「佐原町並み交流館」で総合学習の一環として伊能忠敬について学んだ。

まず、伊能忠敬記念館を逸見指導員の案内で「伊能図」の成り立ちや測量器材の説明を受けた。間縄や鉄鎖を使い測量の基本を学習した後「ジャージャー橋」を歩測で渡り旧宅を見学した。



交流館内をじっくり測量

その後、「佐原町並み交流館」に場所を移して、館内の「御用旗」と「杖先方位盤(わんからしん)」を使い地図作りを実習した。御用旗は会長が持ち、「わんからしん」や梵天の係、北からの角度を測定するグループや歩測をするグループ、スケッチ担当などに別れて、交替しながら測量をした。篠塚先生は用意された鬘をつけ半纏姿で伊能忠敬役を演じた(上写真)。NPOが復元した測量器具を使いながら30分ほどで測量作業を終了し測量結果を学校に持ち帰って完成させた「町並み交流館館内地図」は交流館内伊能忠敬関連資料コーナーにて展示中。(青柳英男)

東京情報大学・香取市の地域連携フォーラム二〇一八 川崎銀行が佐原に荘厳な支店を築いた背景

香取で隆盛を誇った旧川崎銀行を辿る

「佐原三菱館を語る」をテーマにしたフォーラムが二〇一九年一月二十四日(木)午後一時三十分より佐原中央公民館で開催された。明治以来の日本の銀行の歴史と消長について講演と討論があった。川崎家は水戸藩の回漕問屋を代々営んでいた家柄。天保五年十二月に生まれて、十六歳で家業を継いだ八右衛門が初代を名乗り、水戸藩の通貨鑄造に当たった。明治七年、東京で川崎組を設立し、為替方(国庫の出納機関で税金を政府へ送ったり府県の経費などの出納業務を担当した機関)となり、明治十三年に川崎銀行日本橋本店と水戸、千葉、そして佐原の上仲町に支店(出張所)を開いた。八右衛門は那珂湊に回漕問屋を構えている佐原が利根川筋で栄えているの



初代・八右衛門



二代目・八右衛門

を知っていた。また当時の銀行は藩を担保に金を貸したので、輸出用藩生産が盛んな佐原を選んだ。大正二年、三男が二代目八右衛門となったが「建築に大変興味があった人」として有名で、大正三年に当時永澤家の地所に煉瓦造りの西洋式の建物を新築した。政争の町でもあって、川崎銀行は政治的中立を堅持した一方、三菱館の斜め向かいにあった三協銀行は政友会系、佐原興業銀行は憲政会系の機関銀行だったという逸話もある。一九三〇年代後半には、県、大蔵省、軍部が戦争目的の遂行という国策、特に国家総動員法によって銀行の統合が強引に進められた。「いざという時のため、こつこつ貯蓄することが肝要」というのが初代八右衛門の口癖であった。

ただのり 伊能忠誨と祖父忠敬 (その4)

佐原の人々が天体観測を手伝う

文政5年(1822)11月2日、数え年17歳になった忠誨は、帰村して「在所御用」を、折々江戸に出て天文方の御用を勤めるように命じられた。忠誨は測量機器を舟で佐原に送り、現在の伊能忠敬旧宅に子午線儀や象限儀などを据付け、在所御用としての天体観測を始めた。

これをきっかけに、佐原では天文暦学への関心が高まったようで、「伊能七左衛門が算稽古を始める」「永澤治郎右衛門が半円儀の稽古を始める」「圓城寺と新宿の者五、六人に観星鏡で月と木星を見せた」「こうじや甚助が算稽古」といった記事が忠誨の日記に登場する。

文政6年6月1日の日食観測では手伝人として9人の佐原の人々が参加している。太陽の南中時の影の長さを測る圭表儀を永澤治郎右衛門と柏木久兵衛、時間を計る垂揺球儀を箕輪由兵衛と忠吉、天体の高度を測る象限儀を伊能七左衛門と茂兵衛、象限儀に付けた望遠鏡を大川治兵衛と伊能平右衛門、大型望遠鏡の観星鏡を紙屋新五郎が担当した。天文方の役人や忠敬の内弟子たちの役割を佐原の人々が果たしたのである。小田采女、菱屋、宮崎等が見物に来た。

文政8年9月19日に忠誨の天文学の先生である江戸の足立重太郎から、予測データと共に月食観測を依頼され「快晴を祈る」という手紙が送られてきた。10月16日には永澤治郎右衛門らが手伝って月食の観測が行なわれ、「月食観測覚」を作成して江戸に送った。翌月には、この観測記録が天文方の高橋景保から「上出来」と評価されたと伝えられた。忠誨が行なった日食月食や彗星の天体観測記録は現存しており、国宝に指定されている。

幕府に提出された伊能図は江戸城内で厳重に管理されて、一般の人々の目に触れることはなかった。ところが佐原では文政8年8月5日から「中図・小図・江戸図」の土用干しを始めたところ、いろいろな人々が見に来たという。(玉造 功)

NPOの主な事業

- 毎月第一日曜 骨重市
- 月一回 案内班会議
- 八月二五日 消防栓放水訓練
- 九月二八、二九日 小野川清掃
- 十月十四日 大同生命社長来館
- 二三日 理事会
- 十一月二日 火災報知器点検
- 十一月二日 佐倉江戸時代まつり忠敬歩測体験参加者一六八名
- 十一月二日 全国町並みゼミ長野・松代大会
- 十一月二日 千葉大斎藤氏来館・済州大学学生研修
- 十一月二日 千葉県観光ボランティア・ガイド北総エリア大会・成田市
- 十二月四、五日 法政大学学生研修
- 十二月十五日 千葉大学学生研修
- 十二月十八日 さわらほスイーツ活動開始
- 十二月二日 福島大学研修

町並み交流館の行事

- 二四日〜二八日 市内学校との協働さわらほスイーツ
- 一月 六日 獅子舞
- 二月二日、十三日、十九日、二十日、二六日、二七日 さわらほスイーツ活動
- 十五日 全館清掃
- 十九日 宮城県大崎市視察来館
- 二十日 佐倉市日井公民館来館
- 三月九日〜十日 建物公開
- 八月四日(土)〜二六日 北澤聖江絵画展
- 二八日〜九月十六日 「懐かしの昭和展(その二)」
- 九月十七日(月・祝) 千葉交響楽団・弦楽四重奏の調べ
- 八月十八日〜十月十五日 篠塚喜一・町並み写真展
- 十月二三日〜二八日 秋季盆栽展
- 十一月五日〜十八日 橋本京子ミニチュア・ドールハウス展
- 二六日〜十二月八日 魚谷幸子作品展
- 十二月九日 席上揮毫 本宮華水
- 十二月十二日〜二七日 佐原の観光と祭り写真コンクール入選作品展
- 十二月二八日〜平成三一年一月十三日 お正月飾り
- 十二月二八日〜平成三一年一月三十一日 藤ヶ崎たつ子・つる工芸作品展
- 一月十六日〜三十一日 野口正博・切り絵作品展
- 二月九日〜三月二四日 さわら雛人形展示
- 三月九日(土) さわら雛舟

観光案内に感謝の礼状

(その21)

私がみなさんにお手紙を書いたのは山車や伊能忠敬のことがたくさん学べたからです。ちなみに私のお父さんは佐原で山車をひいていて、私も乗ったことがあります。

(松戸市北部小・四年H子さん)

子どもたちにとって、佐原のようなふるい町並みを訪ねるのははじめてで、目を輝かせながら見物していました。伊能忠敬記念館でも、詳しいご案内のおかげで、教科書にないことも知ることができました。

(袖ヶ浦市立蔵波小・教諭)

丁寧でわかりやすい説明をいただき、子どもたちは伊能忠敬の地図作りや町並みについて深く理解することができました。クラスごとに作文や新聞にまとめて役立てています。感謝の気持ちを込めて子どもたちが手紙を書きました。読んでいただけたら幸いです。来年もお世話になると思います。



(君津市周西小・教諭)

「昔かたりの会」特別講演会

老舗・まち・ひとと過去・現在・未来の伝統

講師・塚原伸治 (茨城大学人文社会学部准教授)

第二回「昔かたりの会」が、平成三十一年一月十二日(土)午後二時より佐原中央公民館で行なわれた。塚原講師は地元佐原の出身。滋賀県近江八幡市と福岡県柳川市に長く滞在し民俗学、文化人類学、伝統論を研究してきた。「伝統」とは「過去のものを未来へとつないでいくための今を生きる人々の営みを表わす」という視点から、西日本の二つの城下町と佐原とを比較した。佐原は舟運の衰退、近江八幡は近江商人の都市への流出、柳川は藩の廃止により、近代の繁栄から取り残されて行った。

町の復興は川の復元から

かつて舟運で町の繁栄を担った



川底まで手を伸ばして

「踊れば彼岸に達すべき、一条の小野川の細流は、永久に佐原町を東西に二分して之れを合一ならしめん・・・之れを埋立て東西二部落の溝渠を撤去し、本宿三十一区を一体と為し・・・吾人一個の希望のみならんや」という明治四三年の「さはらタイムス」の正文堂新聞社の論調を読めば、小野川に対する佐原の人々の当時の感情の一端が理解できる。

佐原の大祭は素晴らしい

三百年に渡って育かれた豊かさを内包している佐原の大祭。地元の人々がそのことを知り楽しんでいふことに意味がある。「保存すべし」という消極的な姿勢でなく、各時代の人々が手を加えてきたように、生きた伝統として受け継いでいってもらいたい、と結んだ。

小野川も厄介だった

「踊れば彼岸に達すべき、一条の小野川の細流は、永久に佐原町を東西に二分して之れを合一ならしめん・・・之れを埋立て東西二部落の溝渠を撤去し、本宿三十一区を一体と為し・・・吾人一個の希望のみならんや」という明治四三年の「さはらタイムス」の正文堂新聞社の論調を読めば、小野川に対する佐原の人々の当時の感情の一端が理解できる。

忠敬最後の測量は江戸府内

東日本測量には不満足

忠敬はあくまでも正確な測量を目指しており、西日本と比較して東日本は見劣りがすると再測量を申し出たが、諸事情がそれを許さなかった。全国測量の最終回として江戸府内の測量を命じられた。正確を期すための予備測量が文化十二年(一八一五)二月三日、十九日の十七日間(風雪などの天候不順もあり実施日は十四日間)五街道の始発点と日本橋の間で行なわれた。

いよいよ全国図の完成へ

文化十四年には間宮林蔵の蝦夷地測量の記録も持ち込まれたので、いよいよ最終的な地図の作成作業に取り掛かった。年末には終了する予定であったが大幅に遅れた。その理由は、地図一枚ずつをびったり合わせるのが難しく、その修正のために時間がかかったといわれる。その間にも、忠敬の体力はとみに衰えて、遂に、年号が変わった文政元年四月十三日に七三歳で亡くなった。

死後、三年後に

文政四年(一八一二)七月十日に「大日本沿海輿地全図」と名づけられた地図が完成して、高橋景保と伊能忠誨らは千代田城に登城して、大広間に地図を広げて、老中や若年寄の前に供した。九月四日になり、伊能忠敬の喪が發せられた。

伊能忠敬・第十次測量 全国測量の締め

測量日誌には、測量した地域名は記載されているが、天候以外の唯一の情報は、二月十二日「昨夜、洪川助左衛門殿焼失」として、高橋至時の次男で天文方洪川家の養子となった洪川景佑の屋敷が火事に遭ったことが記されている。第二次江戸測量は、七十二歳の忠敬と下河辺政五郎、坂部八百次、今泉又兵衛、門谷清次郎、永井甚左衛門、尾形慶助で、文化十